あらがんさま

袴垂レ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あらがんさま

【Ｎコード】

Ｎ０１２６Ｈ

【作者名】

袴垂レ

【あらすじ】

周りに迷惑をかけない程度の自分勝手ならば別段口出しする必要もないし、されるいわれもないだろう・・・。いつからか人々は、よほどのことがない限り、他人について無関心を装うことが無難だと考えるようになった。２０２５年に発生した「筑波山死体遺棄事件」は、犯行内容の猟奇性により、衆目を集めた。しかし、それも一時的なことであり、人々はこの事件についても無関心を装った。一方、巷では「ゆとり世代」（２００２年以降に中学校を卒業した世代）によるカルト化が問題視されていた。「無関心」と「カルト

化」は、今に始まった問題ではない。だがこのとき、これらの問題は臨界点に達しようとしていた。現代社会は新たな局面を迎えつつあった。

序（前書き）

この小説の本文はフィクションであり、実在の個人・団体・商品などとは一切関係ありません。
個人の宗教的信条や嗜好により、この小説を読むことによって気分を害される可能性のある方は、本文を読むことをご遠慮ください。
日常会話やブログなどで本文について言及することで生じたトラブル、問い合わせ等に、こちらは関知しません。

以上をご了承された上で読み始めてください。

袴垂レ　記　２００９／０５／２７

序

アラガンサマ　天狗。（水島村）

イマノヒト　天狗の忌言葉。イマは「例の」の意味。

佐伯安一，１９５１，『砺波民俗語彙』高志人社：p. １６

新聞記事１（前書き）

この小説の本文はフィクションであり、実在の個人・団体・商品などとは一切関係ありません。
個人の宗教的信条や嗜好により、この小説を読むことによって気分を害される可能性のある方は、本文を読むことをご遠慮ください。
日常会話やブログなどで本文について言及することで生じたトラブル、問い合わせ等に、こちらは関知しません。

以上をご了承された上で読み始めてください。

袴垂レ　記　２００９／０５／２７

新聞記事１

＜筑波山中から男性遺体、遺棄事件で捜査―茨城県警＞

茨城県つくば市の筑波山神社付近で、男性の遺体が発見された。遺体は、手足や顔が切り取られるなど損傷が激しく、身元は特定できていない。県警捜査１課などは死体遺棄事件と判断し、つくば北署に捜査本部を設置した。捜査本部では、情報提供の協力を求めている。

（２０２５年１０月３日）

＜筑波山死体遺棄事件：遺体の身元特定＞

茨城県つくば市の筑波山神社付近で、３日に見つかった遺体の身元が岐阜県飛騨市河合町、林業作業者　天生（あもう）東吾さん（３８）と分かった。天生さんの友人から問い合わせがあり、捜査本部は遺留品などから身元を特定した。捜査本部は、天生さんが何らかの事件に巻き込まれたものと見て捜査を進めている。

（２０２５年１０月１７日）

＜筑波山死体遺棄事件：殺人容疑で宗教団体の幹部逮捕＞

茨城県つくば市の筑波山神社付近で、岐阜県飛騨市の林業作業者天生（あもう）東吾さん―当時（３８）―が遺体で見つかった事件で、県警つくば北署捜査本部は１１日、別の監禁未遂事件で提訴されていた宗教団体「アマツキツネ」の幹部加山　成美（しげよし）容疑者（３０）を死体遺棄容疑で再逮捕した。

調べによると、加山容疑者は０９年９月３０日夜、団体本部の一室で天生さんの顔や手足を切断した後、翌１０月１日の夜に遺棄現場まで運んだ疑い。加山容疑者の団体は、都内に本部がある。大筋で容疑を認めてはいるものの、動機については「天狗様の思し召しに従った」などと不可解な説明を繰り返しているという。

捜査本部では、天生さんとの間に何らかのトラブルがあったものとし、調べを進めている。

（２０２６年１月１２日）

＜筑波山死体遺棄事件：宗教団体の本部放火される＞

筑波山死体遺棄事件で、死体遺棄容疑で逮捕された加山　成美（しげよし）容疑者（３０）が所属する宗教団体の本部（東京都板橋区赤塚）が全焼し、焼け跡から信者らのものと見られる６人の遺体が発見された。警視庁板橋警察署が身元確認を急いでいる。

１６日午前２時ごろ、団体本部から出火。木造２階建ての建物延べ約１２０平方メートルを全焼した。近隣の住宅などには被害がなかったという。同署では、出火場所が暖房器具などのない建物の裏口であったことから、何者かが放火したものとして調べを進めている。

（２０２６年１月１７日）

＜筑波山死体遺棄事件：留置所内で容疑者自殺＞

筑波山死体遺棄事件で、死体遺棄容疑で逮捕され、茨城県警つくば北署に勾留（こうりゅう）されていた宗教団体幹部加山　成美（しげよし）容疑者（３０）が１８日午後１０時ごろ、県警つくば北署の留置所で首をつって自殺した。１６日の団体本部全焼に続く加山容疑者の死亡で、捜査は暗礁に乗り上げた形となる。

関係者によると、加山容疑者は留置所内で、着ていた服で首をつっており、搬送先の病院で死亡したという。

捜査本部では、団体関係者から話を聞くなどして調べを進めていく方針。

（２０２６年１月１９日）

ヒンナ神　１（前書き）

この小説の本文はフィクションであり、実在の個人・団体・商品などとは一切関係ありません。
個人の宗教的信条や嗜好により、この小説を読むことによって気分を害される可能性のある方は、本文を読むことをご遠慮ください。
日常会話やブログなどで本文について言及することで生じたトラブル、問い合わせ等に、こちらは関知しません。

以上をご了承された上で読み始めてください。

袴垂レ　記　２００９／０５／２７

ヒンナ神　1

＜道路が陥没―富山県南砺市国道＞

５日午後１４時４０分ごろ、富山県南砺市福光の国道３０４号線沿いの道路が陥没した。この陥没により、ガン管が破裂し、住民約３０人が一時近くの公民館に避難する騒ぎとなった。

県下水局によると、穴は約４メートル四方で深さ約５メートル。ガス漏れにより周辺のガス供給が一時停止した。６日午後には復旧の見通し。けが人は報告されていない。現在県では陥没の原因を調べている。

（２０２０年５月６日）

しかし、本当に久しぶりやな。確か、高校卒業以来だから・・・足掛け１０年ってとこか。いやいや、時間が経つのは早いもんだ。

それにしても、驚いた。電車で目が覚めると、隣の席にいるんだもんなぁ。乗り合わせたのが昼間の副都心線で良かった。この路線は、昼間はびっくりするくらい空いてるから、やろうと思えば、同じ車両にいる奴らを見渡すことができるしな。

ファミレスのドリンクバーですまんが、まあゆっくりしようじゃないか。色々話したいこともあるしな。

なに、俺の仕事か。はは、天下のジゴロさんだよ。だから、時間は気にすんな。は、むしろ気にしろだと。お前も出世したな・・・。

そういうお前はこんな真昼間に何してんだ。へぇ、作家か。そりゃ、おめっとさん。お前、昔から小説とか好きやったしな。趣味と仕事が両立してるってのは、とても幸せなことや。

で、今はどんなのを書いてらっしゃるんですか、先生。・・・ほう、天狗様が主人公の小説か。確かに、俺たち利賀の人間は、子どもの頃から山によく親しんどった。天狗様ってのが何なのか、口じ

ゃ上手いこと説明できんが、何となくは分かる。本当に、お前らしい作品やな。

道州制こそ導入されてはないものの、あのあたりも大分変わったと聞く。今じゃ、「南砺市（なんと）」なんて地名もかなり一般的らしいな。「「北斗の拳」かいや・・・」ってのは、親父の口癖だったな。まあ、俺はパチンコでしか知らんけどな。それは置いといて、ともかく、あのあたりは大分変わった。北陸新幹線の開通の影響もあったんやろ。あれで潤ったのは黒部くらいやったしな。新黒部駅なんて、黒部ダム観光のためにあるようなもんやろ。おかげで、関西からの観光客が皆あっちに行ってしまった。挙句、合掌集落だけじゃどうにもならんってことで、誰が言い出したか知らんが、原点回帰しようという意見が広まった。まあ、五箇山は白川郷ほど有名じゃないからな。そんで、昔の民話とかを引っ張り出してくる始末や。しかも、それが最近の妖怪ブームに乗ったもんで、現地の我々にとって見れば何やら変てこなもんやったなぁ。先生には是非、現代の柳田國男になっていただかないと。冗談じゃねぇよ、俺は大真面目や。

・・・そこでだ。お前を見込んで、是非聞いて欲しい話があるんや。お前ならば、きっと良い小説に仕立ててくれると思う。いやいや、そんな勘ぐらなくてもいい。今日会ったのは本当に偶然や。その意味でも、俺は今日お前に出会えたことを嬉しく思っとる。

今でも当時の状況を整理しきれずにおるんで、筋の通った話じゃないかも知れんが、そこは堪忍な。だが、俺は一点だけ確信しとる。ありゃ、「ヒンナ」の仕業や。

そう　怪訝（けげん）そうな顔をすんなって。俺だって、妖怪が実在すると鼻から信じとったわけやない。でも、そうでも思もわんと話がつかんのや。

「ヒンナ」については、事件後にそれなりに調べたつもりや。今でもメモの一部を持ち歩いとる。ええっと・・・、あった。天狗小説の先生に今更言うまでもないかも知れんが、ヒンナってのは・・・

、

「墓場の土を持ってきて、三年の間に三千人の人に踏ませたもので作る土人形で、その間絶対に人にみられてはいけない。これを祀ると欲しい物は何でも持ってきてくれるので　忽ち身上がよくなる。しまいに欲しい物がなくなっても、今度は何だと催促するので困る位だという。三、四十年前まで、急に身上がよくなるとヒンナを祀っているのではないかといったものである。」（佐伯安一，　１９５１，　『砺波民俗語彙』高志人社：　ｐ．１６６－１６７．）

まあ、そういう妖怪らしい。もう一つメモがあったんやが、今は見当たらん。・・・まあいい、メモは追々出てくるやろ。ともかくも、俺は、まさにこの妖怪に遭ったんや。

当時俺は、金沢におった。まあ、やってることは今も昔も変わらん、ジゴロやったけど。

あれは確か・・・、そうだ、２０２０年の６月、ちょうど今日みたいなよぉく晴れた日やった。あの年は、入梅が事のほか遅かった。日本海側では珍しく、毎日のように乾いた風が吹いとった。

乾燥した風にのどをやられたんやろう、あのとき俺は風邪をひいとった。だが、俺は何も心配しとらんかった。それもそのはず、俺には同居人、まあ養い人がおったからな。

名前はもう忘れたが、あれは良い女やった。ああ、器量がじゃないぞ。見てくれは、正直微妙やった。顔は丸っこく小太りで、身長が低かった。その割には背をかがめて歩く癖があり、やることなすことが自信なさ気に見えた。唯一、目だけはぱっちりと大きく、自己主張をしていたが、本人はどうもその目があまり好かんようやった。

まあ、例えるならば、　鬼灯みたいなやつやった。見た目は丸っこく不恰好で、中身を食べようにも不味くて食えん。しかし、大事にしてやっていると面白い一面が見えてくるんや。それがまた飽きない。鬼灯の笛みたいにな。どうや、俺の比喩も上手いもんやろ、

先生。・・・いや、すまん、調子に乗りすぎた。
　あの女とは2年間寝食を共にしたが、その間に聞けたやつの身の上話は驚くほど少ない。やつはあんま過去を話したがらんかったんや。だが、一緒におるうちにぽろぽろと話は聞けるもんや。そのどれもが波乱に富んだもんばっかで、聞いている側は、他人事として聞いている分には面白く聞ける内容やったが、我が身の事ととして聞いてると冷や汗が止め処もなく噴出したもんや。高校時代の男に三又をかけられ金づるにされたのを咎めたら、男の先輩で暴走族に入っとる人に家の窓を全部割られた話。大学の登山部で知り合った先輩が実は毒キノコマニアで、あやうく実験台にされそうになった話。他にも色々あったが、忘れてしまった。
　何にせよ、あの女は苦労人やった。年齢を聞いても適当に誤魔化すばかりで、正確な年齢を教えてくれんかったが、身の上話などから察するに、恐らく２０代後半ってとこやったろう。しかし、どう見てもそうは見えんかった。知らんもんが見れば、３０代半ばと答えたろう。眉間には常にしわが寄っており、唇の皮はよく噛んでいるせいかボロボロやった。
　職業はＯＬやった。職場では、それなりに上手く立ち回っていたようやったが、結局は「便利な人」としか思われてなかったみたいやったな。突然の土日出勤は当たり前で、帰りも遅かった。俺はよく会社の前まで車で迎えに行ってやったもんさ。そして、帰り道はずーっと愚痴とった。
　え、なぜ嫌にならなかったかって。そりゃ、最終的には別れたよ。あいつが他の男と結婚したからな。でも、俺はあの女を気に入とった。ああいう少し不幸な女にちょっと良い思いをさせてやれる、そういうのはジゴロ冥利に尽きるね。ジゴロの中には、女にたかることしか考えてない、ろくでもない奴もいるみたいだが、俺は違う。俺は、女の利他的な満足感を満たすことを目的としていた。つまり、養わせることで自分よりも不遇な人間がいると女に思わせる、そういう狙いが俺にはあったんよ。

おおそうけ、興味深いとな。じゃあ、お前もジゴロになればよくね。はは、そりゃそうや、お前はもう作家の先生だもんな。

さてさて、ヒンナの話やったのに、いつの間にやら俺のジゴロ論になっとるな。いや、こう見えて、実はこの話も結構重要なんよ。ヒンナが出てくる発端となったのは、俺とその女とのいざこざが関係しとるわけやからな。

ヒンナ神２（前書き）

この小説の本文はフィクションであり、実在の個人・団体・商品などとは一切関係ありません。
個人の宗教的信条や嗜好により、この小説を読むことによって気分を害される可能性のある方は、本文を読むことをご遠慮ください。
日常会話やブログなどで本文について言及することで生じたトラブル、問い合わせ等に、こちらは関知しません。

以上をご了承された上で読み始めてください。

ヒンナ神2

最初に女といざこざがあったのは、２０２０年の６月。さっき言ってたように、俺は風邪をひいとった。だが６月の最終日、その日は昼から風邪を押して部屋の掃除をしとった。家にいたから？　いやいや、むしろ掃除をするために家におらんければならんかった。ジゴロにとって月に一度の試験日や。―にぶいやつやな、女の給料日だよ。昼飯がおにぎりになるか、弁当になるか。パチに週何回行けるか。そういったことが大方決まってしまう大事な大事な日や。

午後の７時前には、掃除と夕飯の支度がすべて終わり後は女の帰りを待つばかりになった。だが、いつまで経っても女は帰ってこない。残業なら電話の一つでもするはずやが、それもない。ほこりを落とし明るくなった照明の光がいやにテーブルに映え、時計の針が鳴らす機械的な音が耳に入る。何度も吸殻をベランダのゴミ袋に捨てに行く。なんとなくいじっていたケータイの電池が残り１目盛りになる。時計が午後９時を告げたころ、さすがに「事故でもあったか」と思って電話しようとしたときに、やっと女は帰ってきた。

鍵を開ける音、扉を開ける音、その次に聞こえてきたのはドスンッ、という大きな音やった。玄関とリビングを隔てるドアを開けると、女がカバンを玄関に投げ出ししゃがんどった。どうやら靴を脱ごうとしとるらしい。「上手く脱げずにいるんやな」と思う前に、臭いで「こいつ酔ってんな」と分かった。

「おかえり」

心配している素振りを見せる声色を使う。女が顔を上げる。

「ただいまー」

妙に明るい声で女は答える。真っ赤な顔やった。口元は緩み、自然と息が漏れる。甘い臭いが強かった。

（ほろ酔い程度やな）

と思いつつも、カバンを持ち右手を差し出す。給料目的の打算的

な思いもあった。やけどそのときは、嫌な予感から逃れようとする思いの方が強かった。1年以上も暮らしてきて、俺が給料日に何をするかぐらい女には分かっとるはずやった。連絡もせずに飲みに行くなんてことはまず考えられんことやった。「絶対に何かある」俺の直感が告げとった。

差し出された手に女は素直に応えた。靴を脱ぎ終えたのを見ると、そのまま肩も貸そうとした。

「いや、大丈夫だよ」

「そうけ」

後でこのやりとりを思い出したとき、「あぁ、そうか」と思ったもんや。単にほろ酔いなだけなら、女は流れに任せて肩を借りたやろうがそれを断ったということは、女が酒に酔いながらもどこかで冷静さを保っていた証拠や。そのときの俺はその場その場に対応するのに頭がいっぱいやった。

俺が先に立ち、リビングへ入る。女がテーブル前の座布団に座ったのを見ると、すぐさま水を汲みに行く。会話をさせないよう席を立ったつもりやったが、このとき住んでいた部屋は少し古いタイプのものでリビングとキッチンがいっしょになっとった。こんときほど、「家族と会話ができるキッチン」を恨んだことはなかったわ。こんときは、女がキッチンに背を向ける形で座っとったと思う。やから、少しは考える隙ができたはずや。

（先手を打とう）

コップを探すふりをしつつ俺はそう決めた。

「今日は暑かったね」

「うん」

「今日は乾燥しとったね」

「うん」

天気の話なんか続くわけなかった。今にして思えば、体調のこととか、相手が言葉を重ねなければ返答できん話題があったはずやったが、どうすることもできんかった。

「今日は――」
女が振り返った。
「明日、お母さんに会ってもらいたいねんけど」
夏が近いにも関わらず、空気が張り詰めたねぇ。あまりに突飛な言葉に、俺は正直とまどった。言葉遣いにもとまどった。普段割りと標準語が多いやつやったし、ふとすると俺にさえ丁寧語で話しかけてくるようなやつやから、聞いたとき「おっ」と思ったね。
俺はしばらく目をそらさずにおったような気がする。多分、目をそらせば次の行動、つまり返答しなければならんと自然に思ったんやろ。やがて、女の方が折れた。
「今日、帰りにお母さんに会ったんですよ――」
ほろ酔い状態での説明やったこともあろう、女の話は要領を得んものやったと記憶しとる。まあ、要はこういうことやった。会社は6時には終わり、帰ろうとしたときにフロントから内線が入った。出てみると、母親が来とるということやった。なんでも、病院からの帰りで、顔を見に来たという。そんで、久々に会うたから会話が弾み、俺に連絡するのも忘れて居酒屋へ行った。母親がアパートの前を通りがかったときにベランダに男の人がいるのを見かけたと言われ、とっさに「結婚を前提に付き合っている」と答えたという。それもそのはずで、やつの実家は金沢の中でもだいぶ山の方やから、すごく世間体を気にする。やから、自分が休日の明日、母親に会って欲しいということを言い出したというわけや。
事情は理解できた。やけど、俺はこんときは酔って強気になったところから出たもんかと思っとった。ただ、さっきも言ったように、女は至って冷静やったから、それはまったく検討外れやったわけやな。
「でも、風邪引いとるし」
俺は愛想笑いをした。それがいけなかったんやろうね。
「嘘や、掃除も料理もしとったみたいやし」
急に女の口調が激しくなった。が、そんときの俺は酔いのせいだ

と決め付けた。しばしの沈黙があったと思う。沈黙の甲斐なくこんとき出てきた言葉は、
「ちょっと待って。いきなりそんなん言われても困るわ」
やった。
「親に会って欲しい」と言われたことがあまりにショックで、「どうやって逃げるか」とばかり考えとった。ジゴロとしては失格だと思う。すごく利己的や。でも、俺にも言い分はある。掃除したことや夕食を作ってくれたことを一切褒めてもくれず、自分の要求だけを突きつけてくる女にイラ立ちを感じ始めていたんではないかと思う。
また沈黙があった。顔から少しずつ赤みが引いていったような気がした。やがて、女が口を開く。
「そうだよね、あまりにもいきなりだよね。それに、よしけんにはよしけんのやりたいことがあるわけやし。同棲始めるとき、お互いの生き方には口を出さないって決めたもんね。こんなの特別でも何でもないよね、わたしのいとこもそうやって同棲しとる人がいるわけやし……。」
俺は、女にも「よしけん」と呼ばれとった。こんとき、女の目は空を見つめとったように思う。
言い終わるが早いか、肩からふっと力が抜けたように見えた。座りなおすと、女はスーツの上着を脱いだ。
「ご飯にしよっか」
水の入ったコップを持ったまま、俺は立っとった。何か言い返そうとしたが、いつもの調子はどこに行ったものやら、糊止めされたかのように唇が張り付いて、結局何も言えんかった。
その夜は何事も更けていったけど、それ以降なんとなく女との関係がぎくしゃくし出したような気がする。言いたいことが別にあったんは、誰だって分かる。やけど、そんときの俺には聞き出す勇気はなかった。あんときの関係がちょうど良かった。あれ以上深い関係になると、二人の関係がまずくなる気がした。それは、おそらく

どちらも望んでおらんかったろう。
　それにしても不器用な女やったと今でも思う。まあでも、あの女らしいちゃあらしいわな。不器用に生きてきたからこそ、俺がやつの側にやってきたんやし、やつは俺のように面倒でない男を必要としていたんやろう。

ヒンナ神３（前書き）

この小説の本文はフィクションであり、実在の個人・団体・商品などとは一切関係ありません。
個人の宗教的信条や嗜好により、この小説を読むことによって気分を害される可能性のある方は、本文を読むことをご遠慮ください。
日常会話やブログなどで本文について言及することで生じたトラブル、問い合わせ等に、こちらは関知しません。

以上をご了承された上で読み始めてください。

ヒンナ神3

それからというもの、女との会話は気を張るものとなった。互いに話題の探し合いや。シリアスな話題にならないよう、あれやこれやと話題を探して頭をひねるような状態やった。

そんな状態はひと月も続かず、俺は逃げるようにギャンブルにのめり込んだ。パチにはほぼ毎日通った、競馬にも行った、女の休日には　（福井県の）三国まで競艇をやりに行った。当然、金が続くわけもなく、またひと月もすると昼夜を問わず友達の家に厄介になるようになっとった。友達からした借金が増えていった。

もちろん、辛かった。だって、自分で掲げたジゴロ論に反するわけやからな。女と話をつけてよりを戻そうかとも思った。やけど、時間が経つにつれ俺のプライバシーを侵害してきた女が悪いような気がしてきて、こちらから話を切り出すのが癪（しゃく）なことやと感じるようになった。

そんな感じで、１０月が終わるころには、急に寒くなってきたことを覚えとる。その日はどのつてもダメやった。１０以上あるつてが全部ダメやったんはまったくもって想定外の出来事で、ホテルに泊まる金がないどころか、昼飯を食う金もなかった。暖かいうちは公園で野宿とかもできたが、北国の冬はなめたらあかん、昼間でも外でじっとしとれんようになった。

実に３か月ぶりの帰宅やった。道路からアパートのベランダを見ると、半分に切った牛乳パックがあったっけ。これは、女がちょっとした野菜を作るため、鉢植え代わりにしていたもので、これを見たとき「ああ、まだおるんやな」と思った。内心ほっとしながら、手に大量の汗が出とるのが分かった。

部屋のある三階まで上がり、扉の前に着く。階段を上がるときにはもう出してあったはずの鍵が、ポケットの中に戻ってきとった。扉の前にどのくらい立っとったか、色んな考えが脳裏に去来した。

「とりあえず、ベルを鳴らそう、でも平日の昼やし、あいつおらんやろう」「いや、今は昼やし我慢して夜にまた来ればいいにか」「むしろ、何食わぬ顔で戻ったら…」どのくらい経ったやろうか、不意に鍵が開く音がした。俺はびっくりし過ぎて身じろぎすらできなかったんやと思う。扉を半開きにして女が出てきた。

「あ…、おかえり」

マスクをしたジャージ姿から、風邪をひいとるのがすぐ分かった。あんときの俺を思い出すと、本当に嫌(や)んなる。

（いい口実ができた）

と、正直思ったわ。

「風邪ひいとるやん、大丈夫け？」

そう言いながら、俺は扉を開け中に入った。女を抱えるようにベッドへ運ぶ。熱があるのか、女の身体は熱かった。部屋に入ると、病人特有の甘い匂いがした。荷物を置くと、すぐさま薬箱を取りに行ったんを覚えとる。あとは、看病に＜熱中＞しなければならんかった。

部屋ん中は、3か月前と何にも変わっとらんかった。短い廊下があって、廊下と部屋を隔てる簡素な扉が一枚あり、それを開けると大きめのテーブルが目につく。だが、明らかに部屋の雰囲気が違っとった。何かこう、部屋全体がすっぽりと殻か何かで包まれたような、そんな感じやった。が、＜かいがいしく＞看病する俺には、そんなことはまったくもってどうでもいいことやったんやろう。

「最近流行りの新しい結核やないやろうな？」

「なんか欲しいもんあるけ？」

「汗かいとらんか？」

病人ほど他愛のない会話をしやすい相手はいない。ずっとそんな調子でやり過ごした。

夜になっても、女のベッドに腰掛けて話しかけながら、女が眠るのを待った。やがて、女はまぶたを閉じた。それをゆっくりと見届けてから、俺はベッドの横に布団を敷いて横になり電気を消した。

しばらく開けていた目からは、蛍光塗料を塗った電燈がよく見えた。目を閉じた。女の息遣いと時計の針、近所の公園から聞こえる虫の声が内耳に響く。そのまま寝てしまおう、と思った矢先やった。

「よしけん…、まだ起きてる？」

看病モードになっとったせいか返事が口をついて出てしまった。

「うん？」

言うてからしまったと思ったが、仕方がない。

「今までどこに行っててん？」

「…パチ」

「嘘や」

「…競艇、競馬」

「嘘やん」

女がいたずらっぽく笑ったような気がした。

「…この間はごめんな、よしけん」

予想だにしとらん言葉やった。返事に窮する俺を後目（しりめ）に、女が言葉を継ぎたす。

「謝るからさ、お願いやからさ、お母さんに会ってくれんか？」

まるで全身に染み入るような声やった。あまりに自然やった。やけど、無感情というわけではない。全身に染み入るとしか表現できない声やった。

「……」

俺は目を閉じたまま思案した。

「……無職やし」

俺の声が闇に響いた。しばしの沈黙があった。

「そうだよね」

また全身に染み渡る声やった。そのまま眠りに落ちた。

不思議なことに、翌日から3か月前と同じ日常が始まった。女が会社に行き、俺が留守番をして買い出しに行く。後ろめたさもあったのか、自然とパチへ行く回数も減った。3か月ぶりに部屋に入っ

たときに感じた違和感も、次第に感じなくなっていった。あの夜の会話を俺は特に気に留めていなかった。あいつは前と同じように、俺に会社の愚痴をこぼしたし笑いもした。これが二人にとって適切な関係であり、この状態が続くことが二人にとって最良なのだ。そう自分に言い聞かせた。

すべてが元通りやった、あの日が来るまでは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0126h/

あらがんさま

2010年11月21日12時40分発行